The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞『歩く大阪・読む大阪 ： 大阪の文化と歴史』平田達治 著　鳥影社　2020年
Author(s)	島田, 淳子
Citation	独文学報. 2021, 36-37, p. 83-87
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/98421
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

『歩く大阪・読む大阪–大阪の文化と歴史』

平田達治 著

鳥影社　2020年

島田淳子

9月某日、京都市左京区の書店「ホホホ座」にてあてもなく本を物色していた時のことだ。わたしは、ふと妙な予感がして、さっきまで眺めていた棚に視線を戻した。『歩く大阪・読む大阪』と題された大部の本。「へぇ大阪の都市テクスト論か」と思いながら何気なく視線を落とすと、書名の下には「平田達治」と記されている。「まさか」と思わず目を擦ったが、どうやら見間違えではないらしい。訝しく思いながら書籍を手に取り背表紙をめくると、著者紹介欄には、『ウィーンのカフェ』、『中欧の墓たち』、『放浪のユダヤ人作家ヨーゼフ・ロート』、『ヨーゼフ・ロート小説集』、『ラデツキー行進曲』と、お馴染みの書名がずらりと並んでいる。それは紛れもなく、ヨーゼフ・ロート研究で知られるオーストリア文学研究の大家、平田達治の新刊であった。

なるほど、都市テクスト論といえば平田の真骨頂だ。例えば『放浪のユダヤ人作家ヨーゼフ・ロート』で平田は、ウィーンやベルリンへはもちろんのこと、作家の故郷であるウクライナのブロディやポーランドのウッチにまで実際に足を運んでそれらの地勢や歴史を徹底的に調べ尽くし、ロートの諸作品を理解する上で、舞台となる都市がいかに重要な役割を担っているかを鮮やかに解き明かしている。資料を参照するだけでなく、対象となる都市を自らの足で歩いたからこそ得られる、実感を伴った奥行きのある作品解釈。これこそが、平田の著作の醍醐味である。とはいえ、なぜオーストリア文学研究者がよりにもよって大阪を扱うのか。当惑したまま手にした書籍をレジに持っていくわたしの頭には、数年前の出来事が蘇っていた。

わたしは平田先生に一度だけお会いしたことがある。2015年の春、ちょうど先生が、東京で開催されたオーストリア文学会で「日本オーストリア文学会賞」を受賞された時だ。その日の懇親会の後、先生は親切にも、東京に不案内なわた

しを新宿バスターミナルまで送ってくださった。わたしは当初ひどく恐縮したのだが、そんな気まずさは歩き始める頃には消え失せていた。スーツをピシッと着こなしたこの老紳士の口から、強烈な大阪弁が止めどなく流れ出してきたからだ。わたしはしばらく呆気に取られていたが、目的地につく頃には先生の弁舌にすっかり飲み込まれてしまっていた。

> わたしにとって文字通り故郷と感じてやまない大阪が、どんな人々によって作り上げられ、どんな文化を生み出し、どんな生き方を伝えてきたのか、そして時代によっては豊かな生活を、また別の時代には辛い苦難の時代を生き抜いてきたかを、わたしの最後の一冊として書いてみたいと思って書いたのが、この『歩く大阪・読む大阪』の一冊である。(7-8ページ)

国民学校時代の思い出から始まる本書のまえがきを読んでいると、平田先生の大阪弁が耳に蘇ってくるように思われた。それはおそらく、本書が大阪とその文学を論じるものであるだけでなく、大阪と文学をこよなく愛する平田達治という人物の人となりが少なからずあらわれている書籍だからだろう。

実際本書は、客観的な視点から作品を分析し新たな解釈を提示する文学の「研究書」とは、かなり趣が異なる。もちろん平田は、膨大な文献を調査した上で、文学研究の専門用語を（しかもドイツ語で）織り交ぜながら、大阪を舞台とする様々な作品を鮮やかに読み解いてゆく。しかしながら同時に彼は、幼少期や学生時代の個人的な思い出を述懐し、大阪人としての主観に大いに依拠した見解をあえて表明してもいる。本書において著者平田は、中立的な研究者であるというよりは、大阪文学の「案内人」あるいは「語り部」として大きな存在感を放っているのである。

本書は大きく分けて、大阪の歴史と文化を解説する第1部と、明治から戦後にかけて書かれた大阪を舞台とする文学作品を仔細に紹介する第2部からなる。

第1部では、後半で扱われる織田作之助の『木の都』を入口に、大阪の歴史が紐解かれてゆく。第2部で扱う作品の時代背景を解説するだけかと思いきや、平田は、織田が生まれ育った上町台地の成立過程を縄文時代や弥生時代にまで遡って説明したり、『木の都』における「生国魂神社の境内の、巳さんが棲んでいるといわれて怖くて近寄れなかった楠の老木」という描写から、『日本書紀』に記され

た孝徳天皇による生国魂社の樹の伐採というエピソードを連想したりしながら、古代から明治に至るまでの大阪の歴史を包括的に論じていく。特に、織田が手本としていた井原西鶴や、江戸中期に大阪町人の手で建てられた学問所「懐徳堂」など、元禄時代の大阪における町人文化の紹介には、非常に多くの紙幅が割かれ、丁寧な解説がなされている。本書の随所で見られるのだが、平田の大阪文学論において特徴的なのは、彼が、大阪の歴史や文学をドイツやオーストリアのそれと比較している点である。例えばここでは、元禄文化の繁栄が18世紀のベルリン文化と比べられている。

> 元禄時代に始まった大坂の町人文化、町人による学問の振興発展は、ちょうどあのフリードリッヒ二世（大王）の時代にベルリンが「ユダヤ人啓蒙主義の首都」と呼ばれ、ドイツ・ユダヤ共生の文化が発展開花した状況に似る感がある。（105-106ページ（傍点強調は筆者による））

この一見突飛な比較に、読者は思わず虚をつかれてしまう。外国の文化や歴史を日本史上の現象に例えて理解することはしばしばあるが、ドイツ文学研究者である平田の発想はその真逆だからだ。ここで彼は、大阪および、ベルリンにおける市民文化の開花が、かたや明治維新に、かたやヴァイマル共和国の成立に繋がった点を指摘しつつ、元禄文化が日本史という狭いコンテクストに収まりきらない歴史的意義を持つことを示唆している。このように平田の大阪論は、都市大阪の歴史を極限まで掘り下げているだけでなく、同時代のヨーロッパの状況に対する目配せが効いているという点でも独特である。

第2部「文学作品に描かれた大阪」では、森鴎外の『大塩平八郎』、上司小剣の『鱧の皮』、水上瀧太郎の『大阪の宿』、織田作之助の『夫婦善哉』、『女の橋』、『船場の娘』、『大阪の女』、『木の都』、そして宮本輝の『泥の河』の全9作品を、長大な引用をふんだんに盛り込みながらかなり詳細に説明している。それはまさに平田の口を介した物語の語り直し Nacherzählung であり、それを読んだ読者は、あたかも対象の作品を読み切ったかのような充実感さえ覚えるほどだ。

さて、上に挙げた作品群を論じるにあたって平田が着目するのは、大阪というトポスがどれだけリアルに描かれているかという点である。例えば鴎外の『大塩平八郎』に関しては「当時の現実の大阪の町を精確に取り込んで描いている点

(161ページ)」を評価しながら、作中で言及される場所に実際に足を運んで登場人物の歩みをたどっているし、水上の『大阪の宿』に関しては、作中の描写から舞台である旅館『酔月』の在り処が突き止められることを、自筆の地図を交えながら証明している。また、織田作之助の『夫婦善哉』に関しては、作中に「当時実在した食べ物屋が随所に登場する(323ページ)」ことを指摘し、その所在地やそこで出される名物、こうした場所や食べ物が当時の大阪において持っていた意味を明らかにしながら、この作品が「昭和十年台の大阪市井の世界を再現するリアリズムの極致の文学(353-354ページ)」であることを証明していく。近年サブカルチャーの世界では、アニメや漫画のファンが作品舞台となった土地を訪問することを「聖地巡礼」と呼んでいるが、時に自ら撮影した写真や自筆の地図を交えつつ、作品舞台となる場所を事細かに紹介してゆく第2部は、著者平田を案内人とした大阪文学の「聖地巡礼」の旅だといえよう。

また、大阪の地理の描かれ方と並んで平田が重要視するのは、会話文における大阪弁の使われ方である。とりわけ大阪生まれ大阪育ちの上司や織田、大阪で幼少期を過ごした宮本による見事な大阪弁のトランスクリプションを高く評価し、それが、登場人物の関係性や社会的身分をいかにリアルに描き出しているかを繰り返し力説している。

とはいえ、大阪という街が詳細に描かれているからといって、それを大阪の文学と呼ぶことができるのか、ということについては疑問が残る。例えば、鴎外の『大塩平八郎』に対する評価は一般的に芳しくはない。平田自身も、同書が執筆された当時の社会情勢や、官僚でもあった鴎外の政治的立場を考慮に入れつつも、「大塩平八郎の外周を描くにとどまって、肝心の大塩の行動や心境を掘り下げて描くまでには至っておらず、読者を感動させるような人物像を描出出来ずに終わっていると言わねばなるまい(135 – 136ページ)」と批判的な意見を述べている。つまり鴎外は、入念な調査に基づく精巧な大阪の描写を、物語の演出に十分に活かすことができていないのである。こうした作品を、織田の作品群と並置するのにはいささか無理があるように思われる。

また『大阪の宿』に関しては、東京人水上瀧太郎の大阪弁の不自然さを指摘しながら、この作品を「大阪人ではないエトランジェの作家が書いた『大阪物』である(301ページ)」と評している。そして、同書にあらわれる「煤煙の町」としての大阪の描写を、「大阪の読者にはありがたくない不名誉な大阪の姿が強調さ

れている（302ページ）」といささか不服そうに受け取っている。大阪人平田に言わせると、水上は「本物の大阪」を描ききることができていないのだ。

しかしながら、こうした評価はあまりにも平田の大阪人としての主観に依拠しすぎているように思う。なるほど、水上の描写は大阪人の目から見るとやや不自然に映るかもしれないが、それは同時に、東京人である水上でなければ感受できない大阪の姿でもある。その意味で同書には、一時滞在者としての水上、あるいは主人公三田の大阪に対する距離感が、却ってリアルにあらわれていると言えるだろう。大阪という街は、決して生粋の大阪人によってのみ作り上げられている空間ではない。『大阪の宿』に描かれているような「よそ者」の視点は、大阪という文学的トポスをより奥行きのあるものとして理解する上で、むしろ重要な意味を持っているのではないだろうか。

そうは言っても、生粋の大阪人としては、ちぐはぐな舞台設定や不自然な大阪弁に対して、条件反射のように「なんのこっちゃ」とツッコミを入れたくなってしまうのも当然であろう。舞台芸術の世界でも、ひとたび舞台装置に欠陥が見つかれば、役者がどれだけ巧みな演技を披露しようと、観客は白けて芝居の内容に入り込めなくなってしまう。こうしたことを防ぐためにも、作家は神経を研ぎ澄まして作品のリアリティを追求するのだ。大阪文学におけるその意匠の解明は、生粋の大阪人だからこそできる技でもあるといえよう。

本書において平田は、文学作品の中に書き留められた様々な時代における大阪の現実を拾い集めながら、過ぎし日の大阪の風景を呼び起こしてゆく。それらの多くは現在ではすでに失われてしまっていて、年長者の記憶の中か文学作品の中にしか残っていない。現代を生きるわたしたちには、上司の作品に出てくる鱧の皮の味も、織田の作品を満たす下品で灰汁の強い本物の大阪弁の響きも、荷馬車が行き交う安治川沿いの雰囲気も想像することしかできない。本書は、こうしたつかみどころのない茫漠としたイメージをより解像度が高く鮮明なものへと変える手助けをしてくれる1冊である。本書を通して平田は、かつての大阪の姿を辛うじて知る者として、大阪を舞台とする文学作品と現代の読者との間を取り持ってくれているのだ。

（しまだ・じゅんこ　大阪産業大学非常勤講師ほか）